唯識説における三性と五事との関係

多田　修

一、

五事とは、唯識説において相・名・分別・正智・真如によって一切法を五種類に分類したものであり、『瑜伽師地論』等に説かれる。この五事が三性（遍計所執性・依他起性・円成実性）のいずれに該当するかについて、『瑜伽師地論』以来様々な説があった。五事について『成唯識論』は、三性説に関する諸問題を扱うなかで論じている。そのなかで諸説のうち『瑜伽師地論』による説を基準として、他の説を会通している。ここで問題となることは、三性と五事との関係について『成唯識論』がこのように結論づけたということが、どのような理由にもとづくのかという点にある。そこで本研究では、『成唯識論』にもとづく唯識説において、三性と五事の関係がどのように捉えられていたのかについて、基（六三二～六八二）の『成唯識論述記』の解釈によりながら考察していくこととする。

二、

『成唯識論』は、三性と五事の関係について四通りの説をあげている。それらは『成唯識論述記』の指示に従えば、初めが『瑜伽師地論』の説、二番目が『弁中辺論』の説、三番目が『入楞伽経』の説、四番目が世親『摂大乗論釈』の説となる。[1] それらにおける、五事の三性への配属ならびに五事の指す内容を、『成唯識論』や『成唯識論述記』の解釈にもとづいて表示すると次のようになる（五事の三性への配属については、『成唯識論』における説と、その典拠とされた経論の実際の所説は一致している）。

三性と五事の関係に四通りの説があることについて、『成唯識論』は次のように述べる。

三性・五事相摂云何。諸聖教説二相摂一不定。…（中略）…諸聖教中所説五事、文雖レ有レ異、而義無レ違。然初所説不二相雑乱一。[2]

このように、諸経論の文言には相違があるが、その意味す

〔五事の三性への配属〕

	『瑜伽師地論』	『弁中辺論』	『入楞伽経』	世親『摂大乗論釈』
相	依他起性	依他起性	遍計所執性	遍計所執性
名		遍計所執性		依他起性
分別		依他起性	依他起性	遍計所執性
正智		円成実性	円成実性	
真如	円成実性			

〔五事の指す内容〕

	『瑜伽師地論』	『弁中辺論』	『入楞伽経』	世親『摂大乗論釈』
相	有漏の所変（所詮の相）	有漏心の相分	遍計所執性の所詮	名に随って計せられる所詮
名	有漏の所変（能詮の名）	非有のものを仮説したもの	遍計所執性の能詮	有漏心の見分・相分等の四分
分別	有漏能変の心・心所	有漏心の見・自証・証自証分	有漏心の見分・相分等の四分	名に随って計せられる能・所取
正智	無漏心	無漏心	無漏心	
真如	無為	無為	無為	

るところは異ならないとしており、このうち初めの説（『瑜伽師地論』の説）には雑乱がないと述べる。まず、意味するところは異ならないとされる理由は次の通りと考えられる。『成唯識論』の所説では四分はすべて依他起性とされる。この四分は『弁中辺論』の説では相と分別に、『入楞伽経』の説では分別に、世親『摂大乗論釈』の説では名となる。また『瑜伽師地論』の説では相・名・分別・正智が有為法とされる。このように相・名・分別については同じ名称であっても、その指す内容が経論によって異なる。また正智と真如については、『成唯識論』は常無常門を基本としながら漏無漏門を認

める。したがって、内容が異なるのではないことになる。このようにしたうえで、『瑜伽師地論』の説には雑乱がないとされる。これに対する『成唯識論述記』の解釈は次の通りである。

所執都無、為レ顕レ非レ有仮二説彼性一為二五法名一、謂但有レ名無二実体一故。…（中略）…唯遍計所執相・名二事者、即随二能計依他之心一、仮二立所執一而為二相・名一。…（中略）…計所執随二於此名一横計二於義一為二実有レ体、此非二実有一。於二此非有中一仮名為レ義者、於二非義中一仮二立義称一。…（中略）…楞伽・中辺所説五法、或通二有・無一、或体実有。遍計所執仮亦通レ有。瑜伽等不レ然。顕揚十六説、計所執無、五不レ摂故、即五法体唯是有也[3]。

この文は、『弁中辺論』や『入楞伽経』、世親『摂大乗論釈』所説の五事において遍計所執性とされるものについて述べたものである。『成唯識論述記』はこのように、『弁中辺論』における名や『入楞伽経』における名・相、世親『摂大乗論釈』における義（相・分別）は、いずれも無体法を仮立・仮説したものとする。これに対して、『瑜伽師地論』等所説の五事はすべて有体法であるとする。こうして、雑乱がないとは、無体法を仮立することがないこととしている。さらに正智と真如について、『成唯識論』にもとづく唯識説では漏無漏門を認めるものの、常無常門を基本とする。三性と五事の関係について『成唯識論』にあげられた説のうち、真如のみを円成実性とするのは『瑜伽師地論』の説だけである。この点からも、『瑜伽師地論』の説が基準とされる理由がみられる。

三、

三性と五事との関係についての諸説を、『成唯識論』は『瑜伽師地論』の説を基準としながら他の説を会通している。基は『成唯識論述記』において、『瑜伽師地論』における五事はみな有体法であるが、その他の説では無体法を成立して五事のいずれかに配当したのもとする。これが、『瑜伽師地論』には雑乱がないとされる理由となる。さらに、『成唯識論』では常無常門が基本とされるのであり、真如のみを円成実性とするのは『瑜伽師地論』による説だけである。『成唯識論』にもとづく唯識説において、三性と五事の関係が、『瑜伽師地論』の説をもとに理解されるのは、上記の理由によるものと考えられる。

1　『成唯識論述記』巻九本（大正四三・五四九上～下）
2　『成唯識論』巻八（新導本・巻八・三五～六頁、大正三一・四七上）
3　『成唯識論述記』巻九本（大正四三・五四九中～下）

〈キーワード〉三性、五事、『成唯識論述記』

（龍谷大学大学院）